

「春草」とハルクサ ―季名を冠する物色の倭製―

井上さやか

一 はじめに

二〇〇六年秋に、大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会の発掘調査によって、七世紀中頃とみられる万葉仮名文木簡が出土した。大阪市中央区久宝寺町二丁目の難波宮跡において発見された木簡で、次のような文字が読みとれる。

皮留久佐乃皮斯米之刀斯□

右の文字列は、いわゆる万葉仮名によって「はるくさのはじめのとし」(或いは、はじめしとし)と書かれたものとみられている⁽¹⁾。この新出の木簡は、現在出土しているものとしては最古の万葉仮名文の例となる。

これまでは、徳島県徳島市国府町の観音寺遺跡から出土した難波津歌の木簡(持統天皇乙丑(六八九)年以前)や、奈良県高市郡明日香村の飛鳥池遺跡から出土した万葉仮名木簡(天武朝(六七二―六八六年)頃)などが知られていた。しかし、今回出土した木簡は、土器編年によれば「難波Ⅲ中段階」にあたる七世紀中頃(六四〇―六六〇年頃)とされ⁽²⁾、さらに整地層からみても孝徳朝(六四五―六

五四年)頃の段階にあたる⁽³⁾とされている。総合して、出土した木簡は、前期難波宮が完成する六五二年以前のものであると報告されている⁽⁴⁾。

従来、一般に万葉仮名の成立時期は天武朝から持統朝(六七二―六九六年)の頃とされてきたので、それをさかのぼる時期の実例が発見されたことで大きな話題となった。日本語表記の歴史を考える上で、たいへん重要な発見だったといえるだろう。

さまざまな問題を投げかける資料だといえるが、ここで注目しておきたいのは、ことにハルクサの仮名書き例であったという点である。

ハルクサという語は万葉集中にも例がある連合表現(枕詞)である⁽⁵⁾。このことから、日常的な文章で使用されたとは考え難く、この木簡も和歌を記した一部分と理解されている。

ハルクサという語は、万葉集中で五例が見出され、いずれも「春草」と表記されている。なかでも「春草之(ハルクサノ)」とある例が三例あり、ハジメにかかる用例はないが、シゲシヤメズラシという語にかかっているとみられている。

このような万葉集のハルクサという語については、柿本人麻呂歌の用例(一二九)がもつとも古いことが重視されてはきたが、従来、あまりかえりみられてこなかったといえるだろう。稲岡耕二氏によれば、大きく日本語書記史を捉える場合、まず漢文をそのまま記し、

次に和語や助詞・助動詞をも含めた和文を表記できるようになっていったとされてきた⁽⁶⁾。それにしたがって、「春草」の例も人麻呂による中国文学の語彙の移入であると考えられてきたといえる。

しかし、仮名書き例がこれまで知られてきたよりも早い時期に実例としてみられた以上、単純な移入ではなかった可能性をも視野に入れ、検討してみる必要があると思われるのである。

これまでも、万葉集中に見出されながらも中国文学にない漢語の例を指摘し、それを季節の物色の倭製とみて論じてきた⁽⁷⁾。その際、「春草」のように中国文学にもみられる語彙と同一の文字列を持つ例は、検討の対象とすることが困難であつた⁽⁸⁾。

しかし、今回出土した木簡によつて、文字列が同一の場合でも、その語の成り立ちはむしろ和歌の連合表現の醸成過程に求められ、中国文学の用例とは区別されるべき可能性も出てきたといえるのではないだろうか。しかも、従来は季節の推移を主題として詠む歌の確例が持統天皇の香具山歌（1二八）以降に求められてきたが、それよりも早い時期に、季節を認識し春のはじまりを表現した歌が成り立っていたことになるのである。

そこで本稿では、万葉集やその他の上代文献にみえる「春草（ハルクサ）」の語の用例を検討し、中国文献の「春草」の用例と比較した上で、語の成り立ちとその文化的な背景について考える。あわせて、万葉集中での季名を冠した語彙についても言及しておく

い。

二 ハルクサの連合表現

「春草」の語は、万葉集において五例を見出すことができる。次にその全用例を掲出しておく。

①

過近江荒都時、柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次 畝火之山乃 樞原乃 日知之御世從 〔或云、自宮〕

阿礼座師 神之盡 樛木乃 弥继嗣尔 天下 所知食之乎

〔或云、食来〕 天尔满 倭乎置而 青丹吉 平山乎越 〔或云、虚見 倭乎置 青丹吉 平山越而〕 何方 御念食可

云、虚見 倭乎置 青丹吉 平山越而 〔或云、所念計米可〕 天離 夷者雖有 石走 淡海國乃

樂浪乃 大津宮尔 天下 所知食兼 天皇之 神之御言能

大宮者 此間等雖聞 大殿者 此間等雖云 春草之 茂生有

霞立 春日之霧流 〔或云、霞立 春日香霧流 夏草香

繁成奴留 〔或云、百磯城之 大宮處 見者悲毛 〔或云、見者左夫

思母〕

② 〔1二九〕

長皇子遊獵路池之時、柿本朝臣人麿作歌一首 并短歌

八隅知之 吾大王 高光 吾日乃皇子乃 馬並而 三鶴立流

弱薦乎 獵路乃小野尔 十六社者 伊波比拜目 鶺鴒已曾

伊波比廻礼 四時自物 伊波比拜 鶉成 伊波比毛等保理
 恐等 仕奉而 久堅乃 天見如久 真十鏡 仰而雖見 春草之
 益目類四寸 吾於富吉美可聞 (3二二九)

③ 市原王、宴禱父安貴王歌一首

春草者 後波落易 巖成 常磐尔座 貴吾君 (6九八八)

④ 泉河邊作歌一首
 春草 馬咋山自 越来奈流 鴈使者 宿過奈利 (9一七〇八)

⑤ 春草之 繁吾恋 大海 方往浪之 千重積 (10一九二〇)

用例①・⑤はハルクサノという語がシゲシ(茂し)にかかる連合表現となっている。

用例①ではことに、荒都の描写において重要な部分にあたっている。新日本古典文学大系本『萬葉集』の当該箇所脚注には、後世の和歌にはほとんど例のない特異な語彙であること、それが中国文学から影響を受けて成立した可能性があること、などが指摘されている。この点については本論の問題設定に深く関わってくるため、後に詳述する。

一方、用例⑤は春草がシゲシ(茂し)ことから、恋心がしきりにつづること(繁し)を表現している。それがさらに、大海の波が千

重に積もるほどへと、程度の甚だしさが増すことが表現されるのである。恋を詠む歌ではあるが、巻十に季節による分類にもとづいて収載されているのは、「春草」の語によるとみられる。

次に、用例②はメヅラシにかかっているとされ、『万葉代匠記』では次のように説明されている。

わか草のましめつらしきとは、霜かれたる冬草の、春になりて立かへりもえ出れはつや、かにて、日にそひてめつらしき」物なれば、よそへてほめ奉らる、なり。伊勢物語に、初草のなとめつらしきことのはそとあるもおなし (初稿本¹⁰)

精選本においても同趣の内容が書かれ、見飽くことのない「春草」の艶やかさが、メヅラシという語を導くと捉えられている。契沖のあげた『伊勢物語』の用例は次のようなものである。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見りて、うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ
 と聞えけり。返し、
 初草のなとめつらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな (『伊勢物語』四十九段・若紫¹¹)

男の歌に「若草」とあり、女の返した歌に「初草」とあることから、「若草」と「初草」を同一視し、春に萌え出る草のイメージから、メヅラシにかかると考えられたようである。

ただ、「春草」をワカクサと訓むべきか、「初草」と同一視できるのか、などについてはなお検討する必要もあるだろう。ワカクサという語は、「若草」（九例）の表記をはじめとして、万葉集中にみられる語彙である。「春草」をワカクサと訓んだ古写本もあるが、これらを同一視してよいかは大きな問題であり、第四節において詳しく検討することとしたい。

用例③は、衰退する物の代名詞のように用いられており、常磐である巖と対照的な物として詠まれている。

用例④は、ハルクサがすばらしい物と認識されて、ウマシにかかり、同じ音の連関からウマクヒヤマ（馬昨山）を導いたのではないかと考えられる。従来は、春草がやわらかく馬の好物であるとされて、馬が喰うという説明を介すことで、ハルクサヲウマクヒヤマと訓まれてきたが、このような関わりとすれば、ハルクサノウマクヒヤと訓むべきだろう。第四句の雁の使いとは、『漢書』蘇武伝の故事にちなんだ表現で、万葉集中では「九月のその初雁の使にも」（8一六一四）のようにも用いられている。こうした秋の事象に対して「春草」が表現されたかと思われる。つまり、用例①②④⑤はいずれもハルクサノという詞を用いた連合表現と捉えられるのである。

これらの用例に対して、木簡にみられた「皮留久佐乃」の場合はハジメという語にかかっていることは明らかであるが、ハジメノ

（シ）トシということばが、年の始めの意味であるのか何らかの事物の初年の意味であるのか、明確ではない。下の句があれば判明したかもしれないが、ここから判断できるのは、ハルクサという語がハジメの意味を導く象徴として捉えられていたらしい、ということだけである。

ハルクサとハジメという語が結びつくには、春に始初の意味が認識されている必要があるといえようが、先に見てきた万葉集中の用例では、それが明確に現れているわけではなかった。

そこで、次に万葉集以外の上代文献の用例も検討しておきたい。

万葉集以外の上代文献において、「春草」という文字列かハルクサと訓み得る例を探すと、意外に少ないことに驚かされる。ほとんど唯一の例といってよいのが、次の『日本書紀』の例である。

八月の辛卯の朔にして丁酉に、百濟、上部奈率科野新羅・下部固徳汶休帶山等を遣して、上表りて曰さく、「去年、臣等、議を同にして、内臣徳率次酒・任那の大夫等を遣して、海表の諸の弥移居の事を奏さしむ。伏して恩詔を待つこと、春草の甘雨を仰ぐが如し。」（『日本書紀』卷十九・欽明天皇十四年⁽¹²⁾）

甘雨とは恵みの雨を意味する漢語である。そうして比喩された恩詔を待つ己を「春草」と表現している。ここでは、恵の雨を受けて不毛の冬の大地から萌え出る「春草」がイメージされていると言つてよいだろう。

このように見てくると、万葉集中のハルクサの語は主としてその生える様子を捉えた表現であり、木簡や、日本書紀の例については、ハルクサの生える時期を重視した結果生じた表現であるといえるだろう。

三 中国文学における「春草」

万葉集中の「春草」の語彙は、前記のように中国文学の影響を受けたのではないかと指摘されている。前掲の用例①（人麻呂の近江荒都歌）についての新日本古典文学大系本『萬葉集』の脚注には、後世の和歌にはほとんど例のない特異な語彙であることが指摘された上で、次のように述べられている。

「萋萋として春草緑なり、悲歌して征馬を牧（やしな）ふ」

（初唐・劉希夷「洛川懷古」、亡国春草生じ、離宮古丘没す」

（盛唐・李白「金陵三首」）など、「春草」は、旧都の荒廢、人

事の無常に対して、自然がめぐり生じて不易であることを象徴

する詩語であった。人麻呂の「春草」は、この影響によるもの

かも知れない。

当該箇所は、用例①において、荒都の描写の重要な部分にあっている。それが中国文学における描写と共通するのであれば、何らかの影響は否定できない。

しかし、ここで指摘されている用例は唐の時代の例ばかりである。

むしろ、中国文学における「春草」といえば、次のような例を典拠とした用例が多く、「春草」の本来的な用法もそこにあるのではないかと思われる。

桂樹叢生兮山之幽，

偃蹇連卷兮枝相繚。

山氣隴從兮石嵯峨。

谿谷嶄巖兮水曾波。

猿狖羣嘯兮虎豹嘯。

攀援桂枝兮聊淹留。

王孫遊兮不歸，

春草生兮萋萋。

歲暮兮不自聊，

蟋蟀鳴兮啾啾。

塊兮軋山曲第，

心淹留兮恫慌忽。

（中略）

王孫兮歸來，

山中兮不可以久留。

これは『文選』（騷下・第三十三卷・劉安「招隱士」）にも採られている詩である。内容は、山中の荒々しい自然の中に桂木の枝を折

り取ってしばし留まり住む、隠士への呼びかけである。「王孫」で

あるという隠士が都へ帰らぬ間の一年の経過を描写するのに、「春草」が生え茂っていることや、秋になり蝉が弱々しく鳴くようになることなどが表現されている。そして、結局山中には留まれないのだから都に帰ってきてくれ、という呼びかけで閉じられる。

ここからは、「春草」に荒廃や無常といった意味を酌み取ることにはできないが、この『楚辞』の「招隠士」を踏まえてこそ、「近江荒都歌」が詠出しようとした意図が理解できるのではないだろうか。つまりそれは、近江の都における「王孫」たる天皇の不在と、「春草」が茂ることによって表される不在時間の経過、そして再び「王孫」が帰来することへの願いが表現されていると考えられるからである。

その後の中国文献でも、この詩を踏まえた「春草」の句が用いられている。以下に、代表的な例をあげておく。

ことに万葉歌人たちの必読書であった『文選』において端的な例は、次のような詩である。

躋險築幽居，

披雲臥石門，

苔滑誰能歩，

葛弱豈可捫，

嫋嫋秋風過，

萋萋春草繁，

美人遊不還，

佳期何由敦，

芳塵凝瑤席，

清醕滿金樽，

洞庭空波瀾，

桂枝徒攀翻，

結念屬霄漢，

孤景莫與諼，

俯濯石下潭，

仰看條上猿，

早聞夕飈急，

晚見朝日暎，

崖傾光難留，

林深響易奔，

感往慮有復，

理來情無存，

庶持乘日車，

得以慰營魂，

匪為衆人說，

冀與智者論。

（『文選』詩己・第三十卷・雜詩下・謝靈運「石門新營所住四

〔面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩〕

右の用例の場合は、全編にわたって先にあげた『文選』「招隱士」の語句がちりばめられている。幽深な所に住居を造った際の詩であり、時に友人が恋しくなることもあるが、風物をみているうちに心静かになると詠んでいる。

「秋風」と「春草」に代表させて山中の自然を表現しており、その点では「招隱士」における山中の荒々しい描き方とは異なっている。しかし、「春草」の表現に続けて、友人が旅に出て戻らないことをいうなど、「招隱士」を踏まえた詩であることは疑えない。ここでの「春草」にも、荒廢や無常を表す意味は見出せない。

また、次の二つの用例でも、ともに『楚辞』「招隱士」の表現が踏まえられている

潜虬媚幽姿、
飛鴻響遠音。
薄霄愧雲浮、
棲川作淵沈。
進德智所拙、
退耕力不任。
徇祿反窮海、
臥痾對空林。
傾耳聆波瀾、

舉目眺嶠嶽、

初景革緒風、

新陽改故陰、

池塘生春草、

園柳變鳴禽、

祁祁傷幽歌、

萋萋感楚吟、

索居易永久、

離羣難處心、

持操豈獨古、

無悶徵在今、

（『文選』詩乙・第二十二卷・遊覽・謝靈運「登池上樓」）

稍稍枝早勁、

塗塗露晚晞、

南中榮橘柚、

寧知鴻鴈飛、

拂霧朝青閣、

日旰坐彫闈、

悵望一塗阻、

參差百慮依、

春草秋更綠、

公子未西歸。

誰能久京洛。

緇塵染素衣。

〔『文選』詩丁・第二十六卷・贈答四・謝玄暉「謝王晉安」〕

前の例は、病に臥したままで季節が経過してしまったことを嘆いた詩である。春の訪れを描写するのに、池の堤のほとりに「春草」が生え出したことを詠んでいて、それが「招隱士」の表現を踏まえていることは、詩中に「楚吟」と明記されていることからわかる。また後の例は、春に芽吹いた草が、秋になってさらに緑つややかになることを表現している。ここも、やや表現は異なるが、「春草」の句とともに、相手がまだ都に帰ってこないことを詠んでいることからみて、「招隱士」の例を踏まえているといえよう。ここでも、荒廢ではなく、時間の経過や春の訪れを表現しようとしているとみられる。

このほか、「春草」には次のような例もある。

ア

〔前略〕已矣哉。春草暮兮秋風驚，秋風罷兮春草生。綺羅畢兮

池館盡，琴瑟滅兮丘壟平。自古皆有死，莫不飲恨而吞聲。（後

略）〔『文選』賦辛・第十六卷・哀傷・江文通「恨賦」〕

イ

〔前略〕下有芍藥之詩，佳人之詞，桑中衛女，上宮陳娥，春草

碧色，春水淥波，送君南浦，傷如之何。（後略）

〔『文選』賦辛・第十六卷・哀傷・江文通「別賦」〕

ウ

幽并重騎射，

少年好馳逐，

氈帶佩雙鞬，

象弧插彫服，

獸肥春草短，

飛鞚越平陸，

朝遊鴈門上，

暮還樓煩宿，

石梁有餘勁，

驚雀無全目，

漢虜方未和，

邊城屢翻覆，

留我一白羽，

將以分虎竹。

〔『文選』詩庚・第三十一卷・雜擬下・鮑明遠「擬古三首」第

一）

用例アは、春の草が枯れて秋風が吹き始め、秋風が止むとまた春の草が生える、という季節の代序を表現した部分である。それを通

してこの賦では、すべての人に死が訪れ、死の際にはみな恨みをのんで耐え忍ぶものだと述べている。ここでの「春草」は、「秋風」とともに春秋の代表的な事象として表現されている。

用例イは、春の草が碧に萌えて春の川が緑の波を上げる頃、恋人を見送ることがあるという表現である。春の季節の描写として用いられているといえる。

用例ウは、獣が肥えてきて「春草」がまだ短い頃、と表現されている。自然物の状態を描写することで、時節を描いているということになる。

以上の『楚辞』『文選』以外にも、『藝文類聚』には次のような例がみられる。

(梁沈約) 又春詠曰。楊柳亂如絲。綺羅不自持。春草復黃綠。

客心傷此時。青苔已結洧。碧水復盈淇。日華照趙瑟。風心動燕

姬。襟中萬行淚。故是一相思。(第三卷歲時部上・春)

梁庚肩吾遊甌山詩曰。去子平已久。餘風今復追。未必遊春草。

王孫自不歸。寒雲閒石起。秋葉下山飛。

(第七卷山部上・總載山)

(晉張華) 又詩曰。駕言歸外庭。放志永棲遲。相伴步園疇。春

草鬱鬱滋。榮觀雖盈目。親友莫與偕。悟物增隆思。結戀慕同

儕。援翰屬新詩。永歎有餘懷。

隋江綰遇長安使寄裴尚書詩曰。傳聞令浦葉。遠向洛陽飛。北風

尚嘶馬。南冠獨不歸。去雲目徒送。離琴手自揮。征蓬失處所。春草屢芳菲。太息關山月。風塵客子衣。

(第三十一卷人部十五・贈答)

宋謝靈運悲哉行曰。萋萋春草生。王孫遊有情。差池鷺始飛。夭

農柳初榮。

(第四十一卷樂部一・論樂)

先の『文選』の用例と重なるものは省略したが、それらを含めて、『楚辞』『招隱士』の「春草」を踏まえた表現が多いと言い得るだろう。

ほかに、葉草の一種としての用例(第六卷地部州郡部・地部・

巖「鄭緝之東陽記」、第七十八卷靈異部上・仙道「梁江淹王子喬贊」

など)もある。⁽¹³⁾

このように、「春草」は文字通り春季に生える草を表す句ではあるが、日本においてみられたような、草の茂る様子からの恋心への連想などは認められない。これには、連合表現そのものが、日本文学に特徴的な表現様式であることが関係すると考えられる。

春のはじまりというイメージは通底しながらも、ほかの語との連合する情調においては、異なる背景を担う語彙として日中の「春草」を区別しておくべきであると考ええる。

四 ハルクサとワカクサ

では次に、保留としていたハルクサとワカクサの問題について検

討してみた。

前述のように、「春草」をワカクサと訓む説もある。前掲の用例①⑤について、元暦校本や西本願寺本などでは現行と同じくハルクサと訓まれるが、江戸時代に刊行された寛永版本ではワカクサと付訓されている。大矢本・京大本でもワカクサである。

このことについて、万葉集中のワカクサと訓める確例と見比べつつ確認しておきたい。

万葉集中においては、「若草」と表記された例が九例ある。以下にあげるとおりである。

- a 鯨魚取 淡海乃海乎 奥放而 榜来船 辺附而 榜来船 奥津加伊 痛勿波祢曾 辺津加伊 痛莫波祢曾 若草乃 孀之 念鳥立

(大后・天智挽歌2一五三)

- b 布栲乃 手枕纏而 剣刀 身二副寐佃牟 若草 其孀子者 不怜弥可 念而寐良武 悔弥可 念恋良武

(柿本人麻呂・吉備津采女死時歌2二二七)

- c 春日尚 田立羸 公 哀 若草 孀無公 田立羸

(作者不詳7一二八五)

見歌一首 并短歌

- d 級照 片足羽河之 左丹塗 大橋之上從 紅 赤裳数十引 山藍用 措衣服而 直独 伊渡為児者 若草乃 夫香有良武

(高橋虫麻呂・河内大橋獨去娘子歌9一七四二)

- e 多良知祢乃 波之我目可礼豆 若草能 都麻乎母麻可受

(大伴家持・追痛防人悲別之心作歌20四三三一)

- f 多良知祢乃 波之加伎奈泥 若草乃 都麻波等里都吉 平久 和礼波伊波之牟 好去而 早還来等 麻蘇泥毛知 奈美 太乎能其比 牟世比都之 言語須礼婆

(大伴家持・为防人情陳思作歌20四三九八)

- g 乎之美都之 可奈之備麻世 若草乃 都麻母古騰母毛 乎 知己知尔 左波尔可久美为 春鳥乃 己惠乃佐麻欲比 之路多 倍乃 蘇泥奈伎奴良之 多豆佐波里 和可礼加豆尔等 比伎等 騰米 之多比之毛能乎

(大伴家持・陳防人悲別之情歌20四四〇八)

- h 若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八十一不在国

(作者不詳11二五四二)

i

式嶋之しきしまの 山跡之士丹やまとのくにに 人多ひとおほ 満而雖有みちてはあれども 藤浪乃ふぢなみの 思おもひまつはり
 若草乃わかぐさの 思就西おもひつゝにし 君目一きみがめに 恋八将明こひやあかきむ 長此夜乎ながきこのよを

(作者不詳13三二四八)

用例 a ~ g はツマ(妻)にかかる例であり、もっとも一般的な用法であったと考えられる。用例 h はニヒ(新)にかかつており、用例 i はオモヒツク(思ひ付く)にかかると考えられている。若いということの瑞々しさから、ツマやニヒを導くようであるが、オモヒツクへのかかりかたは未詳である。ただし、オモヒツクとは心惹かれる・愛情を寄せるという意味であるので、愛すべきツマにかかる表現であることから派生したかと思われる。

以上のような「若草」という表記以外にも、「稚草」(10二〇八九、13三三三九)「穉草」(11二二三六一)「若草」(13三三三六)などの例があり、いずれもツマにかかる表現である。

また、仮名書きとしては「和可久佐」(17四〇〇八)の例がある。この例ではツマの語は連合して用いられていないが、アユヒタヅクリ(脚帯・手装)の語を導いており、ともに妻がする習慣であることが指摘されている。⁽¹⁴⁾したがってこの例もまた、ツマにかかる表現としての一形態とみるべきであろう。

このように、ワカクサ(ノ)はほとんどの場合ツマにかかつてお

り、妻の若々しいイメージの連想によって形成された表現であったといえる。したがって、先に見たハルクサ(ノ)とは区別される。

また、前掲の契沖の説では、「初草」とも同一とみなされていたが、万葉集中に用例がなく、上代文献における確例はない。後世に形成された類縁語であると考えておくべきだろう。

後世の和歌をみると、ワカクサの語がしばしば用いられているが、前述のとおり、ハルクサという語は中世に至るまではほとんどみられない。

たとえば八代集においては、ハルクサの例はなく、次のようなワカクサの用例だけがみられる。⁽¹⁵⁾

j

春日野はけふはな焼きそわか草のつまもこもれり我もこもれり

(古今1一七・春上・よみ人知らず)

k

若草にとゞめもあへぬ駒よりもなつけわびぬる人の心か

(拾遺14九〇三・恋四・よみ人知らず)

l

人知れずむすびそめてし若草の花の盛りも過ぎやしぬらむ

(千載14八八八・恋四・藤原隆信)

m

うすくこき野辺のみどりの若草に跡まで見ゆる雪のむらぎえ

(新古今一七六・春上・宮内卿)

n

片岡の雪まにねざす若草のほのかに見てし人ぞこひしき

(新古今11一〇二二・恋一・曾禰好忠)

用例jはツマを導く表現として詠まれ、若々しい容姿を想起させる表現である。

用例kは馬が好んで食用にするという若草を詠み、それでさえも懐かせることができない荒馬のように、とつれない相手の心を嘆く表現となっている。

用例lは、かつて恋心を抱いていた娘の比喻として用いている。

用例mでは、早春の若草を主題として詠んでおり、残雪やその消えた跡までもが若草の色に反映していることを表現している。

用例nは若草に寄せて、ほのかに見る恋を詠んだ例である。

万葉集中でよくあるツマにかかる語としての用例だけでなく、春の雪とともに表現されるなど、春の訪れによる植物の育成を表現して、恋の歌のなかに用いられていく傾向がある。

しかし、万葉集では、春という季節と密接に結びついたワカクサとして表現されてはいなかった。だからこそ、「春草」が併用される意義もあつたと考えられる。

つまり、ハルクサとワカクサの語は、春という季節と若々しさをクサという語に冠することで、本来は異なる語彙としてそれぞれ

成立したが、意味の類似から、ワカクサという語に集約されていったのではないかと考えられる。

管見では中国文学に「若草」の句は見出せないが、「弱草」(沈約「傷春詩」など)といった例はある。しかし、これも同一視はできないと思われ、「若草」は、和歌の表現の蓄積のなかで醸成されていった語彙とみておくべきだろう。

ハルクサが春に萌え出るということから、柔らかいことや若いという意味が連想された語がワカクサではなかったかと考える。

また、「春菜」と「若菜」についても、同様に「春」と「若」をどう訓むかという問題が指摘されてきた。万葉集中の用例をあげる
と次のようになる。

o

春山之はるやまの 開乃乎為里尔さきのををりに 春菜採はるなつむ 妹之白紐いもがしらひも 見九四与四門みらくしよしも

(尾張某8一四二一)

p

従明日者あすよりは 春菜将採跡はるなつむまむと 標之野尔しめしのに 昨日毛今日母きのふもけふも 雪波布利管ゆきはかりつ

(山部赤人8一四二七)

q

難波邊尔なにへに 人之行礼波ひとのゆければ 後居而おくれあて 春菜採兒乎はるなつむこを 見之悲也みればかなしき

(丹比屋主8一四四二)

r
國栖等之 春菜將採 司馬乃野之 數君麻 思比日
(寄草10一九一九)

s
： 乎登賣良我 春菜都麻須等 久礼奈為能 赤裳乃須蘇能
波流佐米爾 尔保比く豆知豆 加欲敷良牟 時盛乎
(大伴家持17三九六九)

t
河上尔 洗若菜之 流来而 妹之當乃 瀬社因目
(寄草喻思11二八三八)

用例o・sは「春菜」の例である。すべて、波線部のようにツム(摘む)という語を伴って成句となっている。一方、用例tの「若菜」では、ツムという語を伴っていない。たった一例ではあるが、「春菜摘み」という成句と「若菜」の語は区別しておくべきだろう。

また、用例pの山部赤人は、万葉集に残された歌から神亀〜天平にかけて活動したことがわかる。用例qの丹比屋主も、神亀年間から天平勝宝年間にかけて『続日本紀』にその名がみえる。用例sは万葉第四期の代表的な歌人・大伴家持である。用例o・r・tについては作歌時期を特定し難いが、用例p・q・sの歌人名から、「春菜」の語の和歌への登場がおおまかにいって万葉後期であることが推定される。

ナという語はそもそも食物を意味する和語であり、その点で植物一般を意味するクサとは区別されていると理解される。そして、用例の時代的な偏在からみて、「春草」「若草」を踏まえての語彙であると考えられる。

なお、「青草」という表記をハルクサと訓む説もある。
振別之 髪乎短弥 青草乎 髪尔多久濫 妹乎師僧於母布
(作者不詳11二五四〇)

この用例の場合は、温故堂本などでは「春草」とあり、寛永版本などには「青草」と書かれている。

「青」は五行に当てはめれば「春」に相当することは、周知のとおりである。しかし、ハルクサと訓むとすれば、用例①〜⑤の「春草」の場合にくらべて、シゲルやメヅラシなどにかかるような意味は見出せず、語の趣を異にしているといえるだろう。本稿ではアラクサの孤例として区別しておく。

ワカクサの語は、万葉集中では天智天皇代以降に見出すことができる。それと前後しつつ「春草」が詠まれているのであり、いずれの語彙も柿本人麻呂による作歌例を含んでいる。

「春草」の用例としては、万葉集中ではその人麻呂歌がもつとも古い例であることから、人麻呂によって和歌に導入された表現とみられてきた。しかし、はじめに紹介した新出土の木簡資料の年代からみて、より遡る時代の産物であることは間違いない。

出土した木簡のハルクサノハジメという表現は、春の訪れとともに草が萌えはじめることを背景として、新春を迎える意識が詠まれていた蓋然性が高い。そうであれば、持統朝以前に中国暦法の新春の認識が歌に反映されていた可能性があり、和歌における暦にもとづいた季節の表現が従来考えられていた時期よりも早くからなされていたと言い得る。

五 季名を冠する語彙と連合表現

これまで「春草」について考えてきた。「春草」のように万葉集中で季名を関する語彙がどのような様相を呈しているかについても、ここで概観しておきたい。

万葉集全体の用例をまとめつつあげると、次のような語彙が見出される。

季名十地形

- 〔春野〕 1五四・五六・2一九九・二三〇・10一八二五・一八七九
〔夏野〕 4五〇二・10一九八三・一九八五・13三二九六
〔秋野〕 8一六一〇・10二二五四・15三六七七・20四三二七・四三一九・四三二〇
〔冬野〕 11二七七六
〔春山〕 1五二・8一四二一・一四五一・9一六八四・10一八二九・一八九二・一九二三・一九二六・13三三三四

〔夏山〕 8一四九四

〔秋山〕 1一六・2九二・一〇六・一三七・二〇八・二一七・7一

四〇九・8一五一六・一五八四・9一七〇三・10二二七七・

二一七九・二一八四・二二一八・二二三三・二三四三・二

二三九・13三三三四・15三七〇七

〔秋田〕 8一五五六・一五六七・9一七五八・10二一〇〇・二一七

四・二一七六・二二三五・二二四八・二二五〇

季名十天象

〔春風〕 4七九〇・10一八五一

〔秋風〕 3三六一・四六二・四六五・4四八八など四九例

〔春霞〕 3四〇七・4七八九・7二二五六・8一四五〇・一四六四・

9一七七二・10一八一三・一八二二・一八四三・一八六二・

一八七四・一八八一・一八八八・一九〇九・一九一〇・二

二五〇・13三二二七・20四三九八

〔春雨〕 4七九二・8一四四〇・9一六九六・一六九七・10一八六

四・一八六九・一八七〇・一八七八・一九一五・一九一六・

一九三二・一九三三・17三九〇三・一九六九・18四一三八

〔春日〕 1五・二九・3三七二・5八一八・八四六・7一二八五・

9一七八二・10一八七六・一九一一・一九一四・一九二一・

一九二五・一九三四・一九三六・13三三五八・17四〇二〇・

19四二九二

「夏影」 7 一二七八

季名十植物

・一般名詞

「春草」(当該例)

「夏草」 1 二九或・2 一三一・一三八・一九六・3 二五〇・7 一二

七二・9 一七五三・10 一九八四・一九九四・11 二七六九・

13 三二九五・15 三六〇六

「秋草」 8 一六一二・20 四三一二

「春花」 2 一六七・6 一〇四七・10 一八八六・17 三九六三・三九六

九・三九七八・三九八二・三九八五・18 四一〇六・19 四一

八七・四二一一

「秋葉」 19 四一八七・四二一一

「冬木」 8 一六四五・一六四九

・固有名詞

「春柳」 5 八四〇・11 二四五三

「夏葛」 4 六四九

「秋柏」 11 二四七八

「秋芽子」 2 二三一・二二三・7 一三六四・一三六五など六七例

季名十動物

・一般名詞

「春鳥」 2 一九九・9 一八〇四・20 四四〇八

「夏虫」 9 一八〇七

・固有名詞

「秋沙」 7 一一二二

季名十人為など

「夏瘦」 16 三八五三

「秋去衣」 10 二〇三四

「冬隠」 7 一三三六・10 一八二四・一八九一

ここでは、標記の文字列を持つ例に限り掲出した。これら以外にも、同音同義の語彙が異なる表記で見出せる場合もある。

これらの中には、中国文学に同一の文字列を見出せる例も含まれる。詳細な検討は別稿を用意したいが、ただ、今後こうした季名を冠する語彙については、中国の語彙と同一文字列を持つ場合でも、連合表現の有無など、文化的な背景を視野に入れつつ考察する必要があると考えている。

ことに、本稿で取り上げた「春草」においては、ハルクサノハジメという語彙の連関が早くみられたことが重要と思われる。後期万葉において、ハルナツミという成句が登場することからみても、ハル(春)という和語がクサヤナと結びつくことによって、ストックフリーズ¹⁶⁾として蓄積され醸成されていったことがうかがえる。

ハルクサノハジメといった表現がすでに七世紀中頃に確認でき、その後の万葉歌の用例において「春草」という表記に統一されてい

ることは、文字の文化と声の文化の双方が重層的に和歌に作用していることを端的に表しているといえるだろう。

こうしたことばのイメージの連関は、口承性を内包していると捉えられる。文字の文化である中国からの影響は文字の上に留まらず、それを享受した古代の日本が、口承による記憶や思考に基づく声の文化のなかで改変したことを垣間見ることができるといえよう。

六 おわりに

新出土の万葉仮名木簡を手がかりに、万葉集中の「春草」という語彙について考えてきた。

万葉集中では、シゲシヤメヅラシという語を導く例がみられたが、木簡例ではハジメという語を導いている。そこに通底するハルクサの意味は、春という季節を象徴することであった。ただし、万葉集中の用例は草の生える様子を捉えた表現であり、木簡の方はより時間を意識した表現であると言い得る。

また、「春草」をワカクサと訓む説もあるが、「若草」をはじめとした用例との比較から、明確に区別するべきであると考えられる。後世にはハルクサではなくワカクサの語が用いられることや、その際の意味内容の範囲に上代のハルクサと重なる部分があることから、ハルクサの語はワカクサに吸収されていったかと推測する。

さらに、中国文学における「春草」との比較を通して、ワカクサ

ノハジメという連合表現や発想が中国文学にはみられないということができた。

これらのことから、「春草（ハルクサ）」は、中国文献の「春草」と中国暦法の影響を受けつつも、日本的な文化背景を背負って誕生した表現であると考ええる。

注

- 1 藤田幸夫「難波宮跡の調査と万葉仮名木簡」(二〇〇六年二月二日・木簡学会) 発表資料に拠る。なお、木簡の釈読と評価については、毛利正守(大阪市立大学教授)、東野治之(奈良大学教授)、榮原永遠男(大阪市立大学教授)、古市晃(花園大学専任講師)、水野正好(財)大阪府文化財センター)各氏に教示を受けたと付記されている。
- 2 佐藤隆「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年―陶器窯跡編年の再構築に向けて―」『大阪歴史博物館研究紀要』二号(二〇〇三年〇月)
- 3 寺井誠「難波宮成り立期における土地開発」『難波宮址の研究』一二(二〇〇四年〇月)
- 4 藤田幸夫、前掲資料
- 5 中西進「万葉集の連合表現」『万葉集研究』2(一九七三年五月)・3(一九七四年六月)、『中西進 万葉論集』第七卷(講談社・一九九五年)所収
- 6 稲岡耕二『万葉表記論』塙書房・一九七六年

- 7 拙稿「物色の倭製―沫雪の場合―」『万葉古代学研究所年報』一号（二〇〇三年三月）など
- 8 拙稿「景物としての『鳴く鹿』―詠物歌と物色の倭製―」『万葉古代学研究所年報』四号（二〇〇六年三月）においては、中国文献にみえる「鹿鳴」と同一文字列を持つ場合もあるナクシカについて述べている。
- 9 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『萬葉集 一』新日本古典文学大系（一九九九年五月二〇日、岩波書店）
- 10 引用文は、久松潜一ほか校訂『契沖全集 第二卷』（一九七三年六月五日）に拠る。
- 11 引用文は、片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注訳『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』新編日本古典文学全集（一九九四年一月二〇日）に拠る。
- 12 引用文は、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守校注『日本書紀②』新編日本古典文学全集（一九九六年一月一〇日）に拠る。
- 13 『爾雅』第十三卷・積草に、「蒨，春草。」とある。
- 14 中西進『萬葉集 全訳注原文付（四）』講談社（一九八三年一〇月一五日）四〇〇八番歌の脚注。
- 15 引用はすべて、新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。
- 16 拙稿「万葉歌における古代の発想と表現」『万葉古代学研究所年報』三号・二〇〇五年三月